

【6】 実践場面

〔1〕 授業づくりの観点

我々は、次のような観点でコミュニケーションに視点をあてた授業づくりに取り組んだ。

(1) 単元や題材の設定及びその配置

高等部の生徒たちは、社会や人との関わり方が未熟で消極的なため、社会参加がスムーズにできにくいという課題を抱えている。したがって、とりあげられる単元や題材には、必然的に社会や人との関わり方を意識したものが多くなる。

- 社会参加するにあたり、生徒たちが直面するであろう生活上の問題を単元や題材としてとりあげる。
- 学習したことが一人ひとりに定着し、生活の中で生かせるようにするために、単元や題材は精選し、年間通して継続実践する。
- 社会や人と関わる経験を増やし、「問題解決する力」や「いろいろな相手とコミュニケーションする力」を高めるために、校外での学習を有効に取り入れていく。
- 生活一般と課題学習の学習内容を関連させることにより、具体的な実践方法と必要な知識の両面からの指導を行い、確実に定着することをねらう。

(2) 指導者の関わり方

- 一人ひとりの活動場面を保障し、すべての生徒が活動しきれるような配慮と工夫をする。
- 教師主導型の展開にならないように留意し、生徒の試行錯誤や発言を大切にする。
- 自己客観視の力を高めるために、指導者は生徒の反応を反響することで「自分の像」を目の前に提示する。そして、生徒自身に「自分」がどうなのかを気づかせ認識させる。
- 全ての教科・領域の場面で、学習活動について振り返って反省する場面を設定し、自分のどこが良くてどこが悪いのか、次はどうすればよいのかを考えさせる。
- 生徒が話し手になる場合には、誰にでも分かるような表現を要求し、何を伝えたいか分からないのに安易に分かった反応を示さない。時には、誰にでも伝わるような表現を提示して復唱させたり、実態に応じてパターン化した表現の指導も取り入れていく。
- 生徒の発言や表情やサインや身ぶりを読み取って対応し、人と関わることの楽しさを学ばせる。
- 一人ひとりの発達課題、成育歴、家庭環境、言語による指示や発問の理解がどの程度であるかをよく把握しておく。それらをふまえ発問や指示や手だてを吟味する。

(3) 個を生かす指導の工夫

- 生徒の実態に応じて、抽出指導を取り入れる。
- 教材には同一教材複数課題が可能なものを選択し、一斉指導の中でも個別の配慮を行っていく。
- 教科や領域の性質により、指導者が意図的にグループ編成を行い、一人ひとりの課題を明確にした上で取り組む場合もある。
- 個や集団に応じて、取り組みやすく学習効果が高まるような教材・教具の工夫をする。